愛　　称

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛　　称

【Ｎコード】

Ｎ４６０５Ａ

【作者名】

蓮千里

【あらすじ】

転勤が多く、昔から人付き合いが悪い私に、何気ない一言で馴染ませてくれた、実話交じりのお話です。

（前書き）

「なんて呼べばいい？」

「――てきとーでいい」

全ての始まりは、この会話から。

愛　　称

「野田ちゃん！おはよー」

２―２の教室に入ると、鷹さんが元気に挨拶してきた。

朝から元気な人だなあ……と思いつつ「おはよー」と返す私。

人付き合いが、とてつもなく苦手な私にとって少し億劫な会話。

私、野田恵美（のだめぐみ）中２。

昨日、この森高中学に転校してきた♀。

鷹さん、こと鷹原瞳（たかはら ひとみ）ちゃんは友達？第1号の♀。
ま、私と席が前後しているから、普通だと思う。

『野田ちゃん』というのは私の愛称。
前の学校でも大抵は、そう呼ばれていたから特に抵抗はない。
皆、『野田ちゃん』とか『野田っち』、『野田さん』、『恵美』だったから。
まさか、愛称がひとつ増えるなんて考えもしなかった。
それも、転校初日で。

「あ、だのさん。おはよ」
「――――――おはよ……むかーや」
朝から脱力感を何故味わなければならないのか……真剣に考えてしまう。
『だのさん』が新しく加わった愛称。
はっきりいって認めたくないが、ある意味自業自得なのが泣けてくる。

「うわ、元気ないねー。どうしたの？だのさん」
白々しく心配するフリをしてくるのが、向家創（むかいや はじめ）♂。
私の悩みの種であり、『だのさん』なんつー愛称を作ってくれた張本人。
普通、苗字を逆から呼ぶか？おい。

「あのね、むかーや。その『だのさん』ってのやめてくんない？」
「だのさんだって、俺のこと『むかいや』って言ってないじゃん。あいこだよ」
いや、確かに『むかいや』ではなく、『むかーや』と言ってますがね……
当たり前っていう顔で言うなよ、おい。

「鷹さんだって『むかーや』って言ってるじゃん！」
「鷹原さんは鷹原さん。だのさんは、だのさんじゃん？」
「――私、昨日転校してきたばかりなのに、何でそんな呼び方――」
「『てきとーでいい』って言ったのは、だのさんだよ」

ああ、そうですよ。確かに言いましたよ……だけど、普通んな愛称作らんわ。

言われるとも想像つかんて。

内心、ムカムカしてた私だけど、鷹さんや、むかーやのおかげ？で、珍しくクラスに溶け込んだ方だろう。

自分でも、驚いてしまう。

しかし、気になることがひとつある。

そしてその原因は、やっぱり、むかーやなんだ。

「だのさん、だのさん、何読んでるの？」

「誰に手紙書いてるの？」

「何の話してるの？」

人が楽しく本を読んでても、前の学校の友達に手紙書いてるときでも、

鷹さんと話している時でも、むかーやは私の近くに来た。

こちらの都合を考えないで。

はたから見れば、付き合っているように見えたのか、クラスの男子が騒いだこともあった。

面倒だから私は無視してたし、むかーやだって肯定も否定もしなかった。

だからこそ安心できたのか、安心と言えるのかわからないけど。

私とむかーやは、それなりに楽しんでたんだ。

まあ、時に私が、むかーやに足を引っ掛けて転ばしたこともあるけれど。

その後は、覚えてない。

「……やられた」とか言って肩を落としたむかーやの姿は、覚えてるのに。

ちなみに、転んだのは、私が瞬時に足の高さを変えたからだ。

じゃないと普通は、引っかからないよね？

＊＊＊＊

クラスが3年の時わかれても、むかーやとはよく喋ったし、ふざけもしてた。

結局のところ、私も、むかーやと一緒にいることで楽しんでいたんだ。

「あ”！ハンカチ忘れた」

「……ハンカチっていうより、ミニタオルだよねえ、これ」

鷹さんと話している時、お茶をうっかりこぼした私は急いで拭こうとした。

が、問題のハンカチがない。

そんな時に、むかーやの声がのんびりと聞こえる。

「やあっと気が付いたの？だのさん」

「……むかーや、いつの間にすった……」

てか、いつクラスに来たんだよ！とあえて追求しなかったのは答えを知っていいたからだ。

「遊び来た」

とても単純明快な答えだ。

ちなみに、むかーやの特技は「すり」。

今のとこ、犯罪を起こしてないからいいものの、いつか疑われると確信している。

＊＊＊＊

そんなこんなで、あっという間に時は過ぎて卒業式を迎えた。

2年間しか足を運ばなかった学校とも、お別れだ。

そして、鷹さんとも、皆とも、もうなかなか会えない。

進路が皆別々だから。

同じ学校にでも進学すれば会えるだろう。

でも、勉強嫌いな私は、私立の学校に進む。

それも、遠いところ。

その上、田舎なとこに建っているから、もう、皆とは滅多な限り会えないだろう。

ま、会ったところで、何の話すればいいのかわからないけどね。

そんなことを胸に秘めて、迎えた卒業式。

本当に森高中が好きだったのか、知り合いの男子が泣いていた。
それにつられて、女子も涙ぐみ始める。
『泣ける人は、どんな想いで泣いているんだろう』
私は、漠然としながら卒業式を終えた。
＊＊＊＊
「野田ちゃん！一言書いて～」
「あ、私も！」
「野田ちゃんのにも書くねー」
配られたばかりのアルバムは、あちこちに移動していく。
卒業式が終わり、私たちはクラスへと帰ってきた。
担任が、アルバムを配り終えると、弾かれるように皆が移動していく。
アルバムとペンを持って。

今生の別れでもないのに、泣きながら書いたりしているのがわからない。

元気な声とは裏腹に、皆、悲しんでいた。

書くことで、書かれることで気を紛らわしているかのように見えたのは私だけだろうか。

「だのさん、だのさん」

こんな呼び方をしてくる奴はひとりしかいない。

むかーやだ。

「――――――――てか、クラス別だし、1階と2階で、まるきし遠いと思うんだけど」

今言っても遅いと分かっていながら答える私。

コイツは、もうすぐ高校の入試が始まる。

私立で、さっさと決めてしまった私とは、次元が違う。

明日から暇になる私と、もうすぐ入試を控えた奴の差を、初めて感じた時だ。

「地理の教科書かして？」

「――――――――はい？！」

頭が完全に停止したのは、初めてだ。

何かの幻聴だ、そうに違いない。

だって、入試直前にこんなバカなことを――――――

「地理の教科書、間違えて捨てちゃってさー。

だのさんは、私立決まってるじゃん？だから、貸して？地理の教科書」

言葉も出なかった。

入試直前で、こんな悠長なことをしていていいんだろうか……？

それとも、そんなに自信があるのだろうか……？

「勉強しないと、ヤバイからさー。特に地理は苦手だし」

「なら、どーして捨てるのかなぁ……？」

思い切り両頬を伸ばしてやった。

『イタイイタイ』と言っていたのだろうが、抵抗はしなかった。

だから、伸ばし続けてやったのかもしれない。

＊＊＊＊

「先生！一言書いてください！」

「あ、松島せんせー！写真とろー？」

花道も無事終了。

後は、卒業生と先生たちとの交流会になっていた。

めんどくさがりやの私は、勿論、中には入らない。入れない。

人ごみを嫌い、特別友達が多いわけではない私に、友達とよべる人は片手で十分間に合う。

人との交流をさけてきた私だから、仕方ない。

こうなることなんか、ずっと前からわかってたこと。

だから、なんともない。

淋しくなんか、ない。淋しいっていう、資格はない。

「……無理そうだな」

最後だし、鷹さんたちと帰ろうと思って、待っている私。

鷹さんにもきちんと言ってあるんだけど。終わる気配がない。

「鷹さんは、かわいーし、皆と溶け込むタイプだからなぁ……仕方ないか」

諦めて、先に帰ろうとした時。

「なーに言ってんの？だのさん」

どこからわいててでてきたのか、むかーやが目の前に現れた。

「――――地理の教科書は、今は無いからね？」

「うん、わかってる。だのさん、オキベンしないもんねえ」

冷たく言った私の言葉をさらりと返してくる。

やっぱ、むかーやはよくわからん。

「だのさん、可愛いよ？」

もっとわからんことをさらりと言ってきた。

今、またもや幻聴が……

「可愛いってのは、事実でしょ？」

「――――お世辞でも、嬉しいよ」

「お世辞じゃないし」

なんでこう、こいつはさらりと言えるんだ？！

最後の最後まで、つかめない奴だ。

「忘れるなよ？私の愛称」

私にとって、特別な愛称なんだから……

元気の出る、愛称。

そして、この愛称は、この世で独りしか言えない魔法。

他の人が言っても、効果のない魔法の愛称。

「おし！元気でた。ありがと、むかいや」

そして、さようなら。

今まで、支えてくれてありがとね……

「なんて呼べばいい？」

「――てきとーでいい」

全ての始まりは、この会話から。

この会話に、感謝せずにはいられない。

FIN

（後書き）

転勤多い人なら親近感あるかもしれませんね。
まあ、いい思い出です。

読んでくださりありがとうございます！

Rue

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4605a/

愛　　称

2011年1月28日08時49分発行